

II-68

中小都市河川の一形態と住民意識

九州大学大学院 学生員○山本 賢一
九州大学大学院 学生員 内山 裕三
九州大学工学部 正 員 小松 利光

1. はじめに

最近、各地の自治体において水や緑の言葉を折り込んだスローガンが叫ばれるようになってきており、水辺の再生についても活発な動きが見られるようになってきた。水質改善策としては、下水道整備による汚濁負荷の削減や水質の良い水の導水による希釈等が全国の都市河川で行われている。

本文では将来の中小都市河川のあるべき形態を探る目的で、福岡県久留米市の代表的都市河川であり、実際に筑後川(久留米市を縦断する一級河川)からの導水による浄化事業の行われた池町川について調査・研究を行った。方法としては、池町川の流域全体に渡ってアンケート調査(実施年月日:1989.1/10~15)を行い、それによって得られた結果から現在の池町川に対する住民のイメージを捉え、同時に浄化事業完成直後の資料を利用して、事業完成から現在までの7年間で住民の意識が時間的にどのように変化したかを調べた。

2. 池町川に対する現在の住民のイメージとその変化

2・1 現在の池町川に対する住民のイメージ

分析には、アンケート中のS・D法による形容詞対に1~5の得点を与え、その平均した値を用いた。

比較的大きな傾向を示した項目を挙げると「水量が少ない」「周辺に人家が多い」「両岸が高い」「周辺に史跡が少ない」「周辺に工場が少ない」「水の音がしない」「川に起伏がない」「魚がいる」「庶民的な」などがある。特に、鯉の放流によって「魚」のイメージが強いようである。また、「好ましさ」は池町川に、「親しみ」は筑後川に偏っている。これらから、池町川のおおまかなイメージは、水量が少なく・川に起伏がなく・水の音などしないが・魚が多く見られ・周辺には史跡や工場が少ないが・人家に囲まれた庶民的な川となる。また、「樹木が少ない」「季節感がない」「人工的」などにも偏りが見られ、先ほどの項目と合わせても池町川があまり自然に恵まれた川ではないというイメージが強いといえる。

以上のことから、住民は、池町川は自然味に乏しく、自然と触れ合うという点では(どちらかといえば)筑後川に親しみが持てるが、生活空間において鯉など

の生き物を見て楽しめる場所という点で「好ましい」という評価を与えていると考えられる。また、河川をイメージするときにその周辺の様子の人々の意識の中にかかなり影響を与えていると思われる。

2・2 時間経過による住民意識の変化

a)池町川の印象(図-1):前回と同様、今回も「ドブ川」を挙げた人が多いのが目につく。依然として池町川の印象は良くなってはいない。さらに、細かく見ると「工場や家庭の排水路」がやや減少を見せた反面「雨水の排水路」の割合が大きく増大している。

悪い水質の原因が、工場・家庭の雑排水とする意見から雨水もしくは下水道に運ばれず雨水と共に川に流

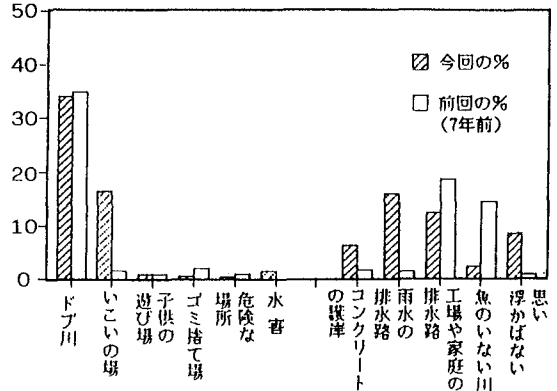


図-1 池町川の印象

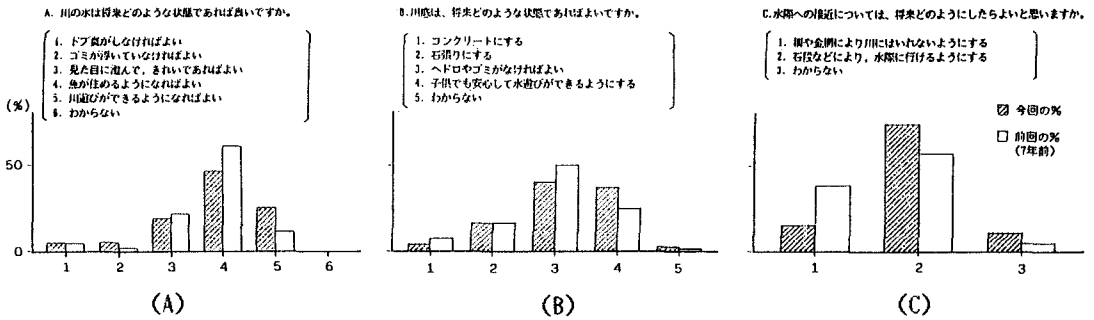


図-2 池町川に対する要望

れ込む汚れた水であるとする意見へと変化してきていることを考えれば、市が池町川浄化の抜本的対策として取り組んで来た下水道の整備(水洗率96.4%)がその効果を現し、住民の意識の中にしっかりと認識されつつあるといえる。

しかし別の意味では、“この下水道に流れ込まない分の汚水を完全に取り除かなければ、池町川は決してきれいにならない”という市に対する事業の不備を指摘しているとも考えられる。

b)池町川の将来に対する質問(図-2(A)(B)(C)):(水質)については前回・今回とも「魚が住めるようになればよい」が高い回答率を示しているが、今回「川遊びが出来るようになればよい」が前回の約2倍の25%ほどにまで増加している。(川底の状態)については、「ヘドロやゴミがなければよい」の割合が一番多く、また、今回「子供でも安心して水遊びができるようにする」で10%強の増加がみられた。(水際への接近)についてみると「柵や金網により川に入れないようにする」の割合が前回の半分以下となり、「石段により水際へ行けるようにする」が約15%の増加を示している。

これらの事から、周辺住民が池町川に対して生き物の存在を望む気持ちは時間的に変わらないものであり、逆に、この7年間で“見た目に汚くなければよい”という程度から“自ら水と親しめる空間であってほしい”という積極的な川への接触を求める気持ちへと変化してきていることがわかる。

2・3 河道改造に関する住民意識

(2)の案を望んだ人が約半数(44.4%)で親水を望む人の多いことを示しているが、(3)の案を選んだ人が少ないこと(23.1%)を考えると、今の池町川に対して人々は積極的な水との触れ合いを望んではいないが、過度の人工化による親水空間は必要としていないと考えられる。

3. おわりに

現在の池町川にはそれほど自然に豊んだというイメージはないが、都市の中において魚などの生物を楽しめる場所と評価されている。

河川に対する周辺住民の評価は、その時の川の状況によって変化する。即ち、その時点で良い評価を受けるものでも長いタイムスケールで見ると行くうちにはその評価は変わってしまう。

河川の親水性を考えると、人々の間には「水に触れたい」という意識が生まれるようであり、その点に対して考慮が必要である。しかし、現在の池町川においては親水性ばかりを優先した過度の人工化はあまり望まれていない。河川をイメージする際、周辺の様子が大きく影響してくるので河川の景観設計を行う場合に考慮する必要がある。

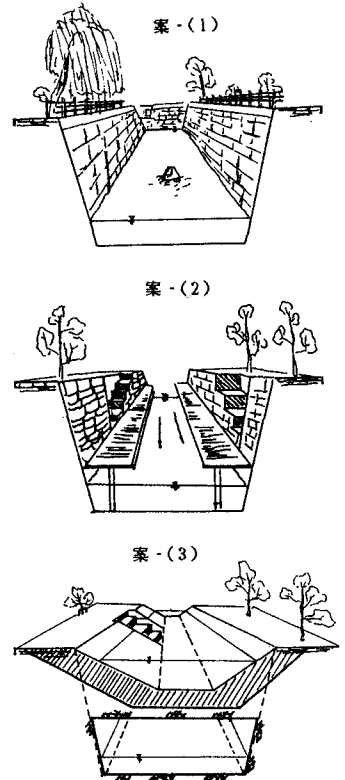


図-3 河道改造案